

中国の大学生の自尊感情と愛着スタイルとの関係に関する 心理学的研究

彭 鳳 飛 浅 川 潔 司

(兵庫教育大学)

福井紫帆 由 恵子 福本理恵
(豊中市教育センター) (中国海口経済学院) (姫路市)

本研究では、自尊感情と大学生の愛着スタイルの関連を検討した。自尊感情の尺度と成人愛着スタイルの尺度を取り上げ、253名の大学生を研究対象者として回答が求められた。そして、二要因分散分析により、自尊感情と愛着スタイルの下位因子との関連を検討した。結果は次のように

- 1) 大学生の自尊感情が愛着スタイルと関連する。自尊感情の低い人は見捨てられと不安親密性の回避が強い、自尊感情の高い人は見捨てられ不安と親密性の回避が低いということがわかった。
 - 2) 愛着スタイルにおいて、性差がないことがわかった。
 - 3) きょうだいの有無については、愛着への関係が見られなかった。
- これらの事実に関して、青年期心理学的観点から検討が加えられた。

キーワード：成人愛着スタイル、自尊感情、きょうだいの有無

彭 鳳飛：兵庫教育大学大学院・学校心理学・発達健康教育コース院生，〒673-1415 兵庫県加東市下久米942-1

E-mail: penghuangfei20@yahoo.co.jp

浅川 潔司：兵庫教育大学大学院・発達人間教育専攻・教授，〒673-1494兵庫県加東市下久米942-1

E-mail: kasa@hyogo-u.ac.jp

福井 紫帆：豊中市教育センター 〒676-1494兵庫県加東市下久米942-1

E-mail: kurenai1986@hotmail.com

由 恵子：中国海口経済学院 〒571127 中国海口市海口経済学院

E-mail: fengye1218@126.com

福本 理恵：東京大学大学院先端科学技術研究センター，〒671-0251 兵庫県姫路市花田町上原田

A Study of the Relation between Adult Attachment Styles and their Self-Esteem of College Students in China

Huangfei Peng and Kiyoshi Asakawa

(*Hyogo University of Teacher Education*)

Shiho Fukui

(*Toyonaka City Center for Education*)

Keiko You

(*Haikou College of Economic*)

Rie Hukumoto

(*The University of Tokyo*)

The present study was designed to reveal the relation between self-esteem and attachment styles of college students. A questionnaire on self-esteem and adult attachment styles was given to 253 Chinese students. Main findings were as follows :

- 1) The students' self-esteem were related to attachment styles. The students who have higher self-esteem showed low score of attachment anxiety and attachment avoidance, and the students who have lower self-esteem showed high score of attachment anxiety and attachment avoidance.
- 2) Sibling did not effect on the attachment styles.
- 3) Significant gender difference were not found on attachment styles.

Those findings were discussed from a viewpoint of developmental psychology.

Key Words: adult attachment styles, self-esteem, sibling effect

Huangfei Peng : Graduate School of School Education, Master's Program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan.

E-mail: penghuangfei20@yahoo.co.jp

Kiyoshi Asakawa : Professor, Development of School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan.

E-mail: kasa@hyogo-u.ac.jp

Shiho Fukui : Counselor at Toyonaka City Center for Education Hyogo University of Teacher Education, 942-1

E-mail: kurenai1986@hotmail.com

Keiko You : Teacher at Haikou College of Economics Haikou College of Economics Haikou City 571127 China.

E-mail: fengye1218@126.com

Rie Hukumoto : Department of Advanced Interdisciplinary Studies, The University of Tokyo, Kamiharada, Hanada, Himeji-city, Hyogo 671-0251 Japan.

問題と目的

愛着とは、危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、また、これを維持しようとする個体の傾性である (Bowlby, 1969)。すなわち、人が特定の対象との間に築く緊密な情緒的結びつきと定義される。これまで愛着を説明するには乳幼児期の親子関係 (特に母子関係) が主に取り上げられてきた。無力状態で誕生する乳児は、自らの生存をささえるために養育者となる周囲の大人を自分に近づけ、その状態を維持しようとするような生得的な傾性を持って生まれ、また大人の側もこのような乳児の示すシグナルに応え、保護しようとする行動傾性をもつ。こうした保護—被保護の相互作用を通して、乳児は自分の発するシグナルに対していつもすみやかに応え、頻繁な接触を持つ大人に信頼と親密の感情を抱くようになる。こうして形成された乳児と特定の大人 (多くは母親) との間の心理的な絆を愛着という (Bowlby, 1969)。

愛着理論が拡張する形で成人愛着理論は発展してきた。乳児期に形成された養育者に対する愛着は、そのままの形で持続されるのではなく、時間の経過とともに自己と他者に対する信念として再構造化される (Bowlby, 1973)。彼はまた、その再構造化されたものを、内的作業モデル (IWM: internal working model) とよんで、自己に関するモデルと他者に対する内的作業モデルとは補完的な関係から構築されると主張した。他者モデルとは他者の利用可能性や支援への期待を指す。他者モデルが肯定的な人は他者に対して支援を期待できる存在であると考えているため、他者に対して親密性を希求し、回避が少ないという形で現れる。一方、自己モデルとは自己への価値意識を指す。そのため、自己モデルが肯定的な人は自己への価値意識が高いため、他者との関係に対する不安の低さという形で現れる。

Bowlby (1969) は、幼児における愛着行動の理論化を行い、愛着パターンが幼児の愛着行動と母親 (愛着人物) の愛着行動との相互作用の質に応じて形成されると想定した。それならば、成人の愛着プロセスを解明するためには、まず成人の愛着行動を分析する必要があるだろう。

そこで、中尾・加藤 (2001) は、愛着行動の記述を女子大学生から集めた。その結果、ネガティブな感情は、イライラ、不安、悲しみなどである。また愛着人物は、友人 (60.98%)、家族 (17.89%)、恋人 (13.82%) の順に多かった。成人の愛着行動は主に会話を介して行われ、幼児のみならず成人でも、愛着人物との距離が近い状態で愛着行動が行われると示唆された。この研究の課題としては、被験者が女性のみであること、愛着スタイルごとに愛着行動が異なるかを検証していないことがあげられる。

また大石・小林 (2006) の研究では、IWM のアンビバレント傾向では育児への不安感に正の相関、回避傾向では子どもへの愛着・受容、親になることに対する期待感に負の相関が認められた。アンビバレント傾向の場合、人間関係に自信が持てず、育児に対しても不安になり、回避傾向の場合、親とは不安定な愛着関係であり、この傾向が次の世代へと引き継がれていく可能性がある。しかし、幼児期の愛着関係とは不可逆的なものなのだろうか。

嶋田・田中 (2005) の研究では、愛着のスタイルが幼少期の母親への愛着の質によって不可逆的に決定されるとまではいえなかった。むしろ他者との間で何らかの変化がもたらされるような経験をし、その変化がポジティブなものとして認識されることによって、幼少期の愛着の安定が低かった者でも、内的作業モデルの安定が高くなる可能性が示唆された。またその変化では「自信・積極性の獲得」が重要であると推測された。なお変化のきっかけとなった他者として、「友達」が全体の半分以上を占めており、「親」や「家族」は上位には入らなかった。中尾・加藤 (2001) の研究では、愛着の対象として家族が友人の次に多いが、家族は幼少期から変化せずに存在することが多いため、自信や積極性を獲得できるような“変化のきっかけ”とは考えられない。

これらの研究から、幼少期の愛着関係は不可逆的なものではなく、その後に出会う友人や恋人の存在によって、IWM の安定が高くなる可能性があることが明らかになった。そしてそのためには、自己と他者を明確に分離したのものとして、相互に自律し尊重しあった存在として認識し適切なバランスを維持する能力の発達が必要であると考えられる。

自己と他者を相互に尊重しあう前提には、自己を尊重することが重要だと考えられる。そのため、自己概念に関わる自尊感情を取り上げる。

遠藤辰雄 (1992) によれば、自尊感情とは、「人が自分の自己概念と関連づける個人的価値及び能力の感覚」p.19と定義づけられる。自尊感情が高いということは、自分自身を尊敬し、価値ある人間であると考えられる程度が高いことであり、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味するとしている。自尊感情は個人の行動や態度などを理解するのに重要な概念であり、対人行動にも大きな影響を及ぼす。一般的に自尊感情は自己概念の評価的側面であると考えられており、自己評価とほとんど同義で用いられる。

自尊感情は適応や精神的健康の指標とされており、自尊感情の高い人は精神的に健康であり、適応的であるという研究が報告している。例えば、桜井 (2000) によると、自尊感情は抑うつや不安、絶望感と負の相関がある

と分かった。また、八木 (1995) は自尊感情の高さは精神的健康の指標であるとして注目している。つまり、自尊感情は適応と精神的健康を促進させる要因だと指摘している。

一方、高井 (1999) は他者との関わりの中で、自己を肯定的に見る自尊感情が持てること、自己の存在価値を自覚できることが重要であると指摘した。唐 (2007) は自尊感情の低い人は、否定的な自己評価を持ち、自己信頼感が欠如し、自分が対人関係の中でうまく振舞えないのではと不安を感じ、失敗を人に見られて自己評価が傷つくことを恐れると示唆している。また、遠藤由美 (1999) は自尊感情が高い人は低い人より積極的に意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己に対しても他者に対しても受容的であることを明らかにした。遠藤由美 (2006) は自尊感情が社会的排除・拒絶への反応に及ぼす効果を研究し、自尊感情の高い人が自分の個人的な要請を友人や恋人などに受容してくれると指摘した。そのため、自尊感情は対人関係の中の自分と他者に影響を及ぼすと考えられる。

金政・大坊 (2003) は青年期の安定型の愛着スタイルでは、恋愛に対する肯定的なイメージが最も親密な異性への愛着やその関係への満足度・重要度を規定しており、アンビバレント型の愛着スタイルでは、安定型の影響過程と類似した傾向を示しているが、恋愛を献身的に捉えているかどうかは相手への愛着や関係への満足度を規定しているという点で安定型のものとは異なっていた。また、回避型の愛着スタイルでは、安定型とは反対に恋愛を否定的に捉えていないということが相手への愛情を規定する要因だと指摘した。一方、片岡・園田 (2008) は愛着スタイルの違いが恋人に対する依存の程度を予測できる。そのため従来の青年を対象にした愛着研究は異性との愛着スタイルとして捉える傾向が強い。浜井・利根川・小野田・上淵 (2011) は安定した愛着傾向を持っている人ほど、自己と他者についての肯定的な表象が形成されおり、対人葛藤事態において他者との分離の危機を回避する自信があることを指摘した。一般他者との対人関係の様式の愛着スタイルについて、研究の数が少ないという現状である。そのため、大学生を対象にし、一般他者への愛着関係に関する実証的研究が必要である。

青年の愛着に関して、Collins & Read (1990) は愛着スタイルと対人関係との関連について検討を行った結果、性差が見られることを指摘し、親密性回避の高い男性と、関係不安の高い女性が、対人関係を深く結び付いていることを明らかにした。佐藤 (1993) によれば、親以外の対象への愛着では男性の方が「拒否」が高く、女性の方が「安心・依存」が高いこと、さらに、一般他者に対する「親和性」は女性の方が高いことが指摘されている。そのため、成人の愛着を検討する場合には、性別に分け

て検討する必要があるだろう。

また、愛着とは一般に育児を担い、乳児と過ごす時間の最も長い母親に対して形成されるものと考えられてきたが、愛着対象は必ずしも母親に限定されるわけではない (詫摩・戸田, 1988)。Stewart (1983) の研究では、4歳児と15ヶ月児のきょうだいがストレンジャーと接する際にお互いを安全基地 (secure base) として用い、母親からの分離不安がある下の子どもは、上の子どもによって適切になだめられたと報告されている。直接育児を行わないきょうだいに対しても愛着は形成されるのである。そのため、非一人っ子は親への愛着が存在すると同時にきょうだいへの愛着も存在である。しかし、一人っ子はきょうだい関係の経験がないので、きょうだいへの愛着経験がないといえる。釣田 (2007) は児童期のきょうだい関係と青年期の友達・先輩・後輩に対する愛着関係との関連という研究で、男女ともに愛着関係と共存関係 (きょうだい関係の下位因子) との間に正の相関があり、また、きょうだいとの愛着関係が強いほど、異性の友達に愛着を感じやすいと指摘している。また、福田 (2006) はきょうだいと良い関係が構築できていない人が、両親・友達を疎外し孤独になる傾向があることを指摘している。

本研究では、より安定な愛着スタイルを促進していく上で重要な方策が見えてくる。本研究の第1の目的は、自尊感情に着目し、大学生を中心に、自尊感情の高低の程度により、愛着スタイル不安定側面に対する影響を検討することである。また、第2の目的はきょうだいの有無による、大学生の愛着スタイルの差異を明らかにすることである。

方法

調査対象者 中国海南省のA大学に在学する学生253名 (男性56名 女性197名) が本研究の協力者として参加した。

材料

愛着測定 (中尾・加藤, 2004) の成人版愛着スタイル尺度で二つの下位尺度 (関係不安, 親密性の回避) からなり下位尺度2因子の計30項目。「全くあてはまらない」「すこしあてはまる」「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」の4件法回答が求められる。

自尊感情測定: 自尊感情とは、自尊感情を自分自身の能力や特性に対する肯定的あるいは否定的な感情であるということ (山本・松井・山城, 1982)。本調査では、大学生における自尊感情がどの程度あるかについて測定した。測定には、RosenbergのSelf-Esteem Scaleの邦訳版である自尊感情尺度10項目採用し、4件法で評定を求めた。

二つの質問紙中国版翻訳として、日本語に堪能な中国

人が翻訳し、日本語原文を読んでいない別の中国人がバックトランスレーションした内容が原文の日本語の項目とほぼ同一の意味内容であることを確認することで、中国版を完成させた。

手続き

授業間の休憩時間を利用して一斉に実施した。

研究協力者には調査者から、①大学（授業）の成績とは無関係であること、②調査結果は研究目的以外にはいかなる用途にも用いないこと、③回答したくない質問には回答しなくてもよいことが提示され、回答された質問紙はその場で調査者によって回収された。

要因計画

愛着スタイルの合計得点および各下位尺度の合計得点を従属変数とし、性（男子・女子）、自尊感情水準（H群 M群 L群）を独立変数とする。2（性）×3（自尊感情）の2要因分散分析を行った。

また、愛着スタイルの合計得点および各下位尺度の合計得点を従属変数とし、きょうだい（有・無）、自尊感情水準（H群 M群 L群）を独立変数とする。2（きょうだい）×3（自尊感情）の2要因分散分析を行った。

結果

愛着スタイルの因子分析

愛着スタイル30項目に対して主因子法による因子分析二要因分散分析

を行った。複数バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は6.54, 3.66, 1.71…というものであり、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行ったところ、因子の解釈可能性から2つの因子が得られた。また、2つの因子間の相関は.09と、ほぼ直交していた。

2因子がほぼ直交していたので、主因子法・Varimax回転による因子分析を行った（Table1 詳細については、楊・浅川・福井・梶原・南 2013を参照）。因子負荷量が.40未満の項目、二重に負荷している項目を除いた22項目の累積寄与率は33.72%であった。

信頼性係数は全体で $\alpha = .84$ 。各因子は以下のように解釈された。第1因子は、私は見捨てられるのではないかと心配することや私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配するといった16項目で構成されていることから、「見捨てられの不安」因子と命名した。 $\alpha = .87$ 。第2因子私は人に心を開くのに抵抗を感じることと私は人とあまり親密にならないようにしているといった内容の6項目で構成されていることから、「親密性の回避」因子と命名した。 $\alpha = .73$ であった。

自尊感情測定尺度の合計点の平均値とS.D.に基づき、自尊感情高得点群（H群、平均得点+1/2 S.D.以上）と自尊感情低得点群（L群、平均値-1/2 S.D.未満）、及

Table 2 自尊感情水準群得点とS.D.

		性別	N	mean	S. D.
自尊感情	L	男	23	1.39	0.50
		女	60	1.28	0.45
	M	男	18	1.17	0.38
		女	73	1.32	0.47
	H	男	15	1.40	0.51
		女	64	1.36	0.48

Table 3 自尊感情の水準と愛着スタイル得点平均及びS.D.

自尊感情の群分け	一人っ子			非一人っ子			F 値
	L群(26)	M群(26)	H群(29)	L群(57)	M群(65)	H群(50)	
見捨てられ不安	36.81	33.15	32.52	36.16	33.46	30.60	群の主効果 6.69***
	8.62	8.42	8.42	8.75	8.29	6.85	きょうだい有無の主効果 0.46
親密性の回避	13.42	11.13	11.07	13.18	12.29	11.68	群の主効果 7.50***
	3.30	3.86	2.71	2.67	3.17	3.47	きょうだい有無の主効果 1.30

上段：平均値 下段：標準偏差 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

Table 4 自尊感情の水準と愛着スタイル得点平均及びS.D.

自尊感情の群分け	男性			女性			F 値
	L群(23)	M群(18)	H群(15)	L群(60)	M群(73)	H群(64)	
見捨てられ不安	36.00	30.75	29.00	13.90	13.10	12.63	群の主効果 8.4***
	10.02	7.14	7.94	5.86	5.75	5.29	性の主効果 0.94
親密性の回避	10.33	8.75	10.10	9.00	9.24	8.62	群の主効果 5.63**
	0.82	2.22	1.66	1.34	1.99	1.47	性の主効果 0.32

上段：平均値 下段：標準偏差 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

び中間群 (M 群, H 群にも L 群とも属さない) の 3 群に分類された。各群の人数及び, 平均得点, 標準偏差を Table2 に示した。

愛着スタイル尺度の「見捨てられ不安」得点を従属変数とし, きょうだいの有無と自尊感情水準を独立変数とする二要因分散分析を行ったところ, 自尊感情水準に主効果が見られ ($F(2.247)=6.69, p<.001$), 下位検定の結果 (参照 Table3), L 群>H 群という関係で有意差が認められた。しかしながら, きょうだいの有無の主効果は有意ではなかった。交互作用は有意ではなかった。

愛着スタイル尺度の「親密性の回避」得点を従属変数とし, きょうだいの有無と自尊感情水準を独立変数とする分散分析を行ったところ, 自尊感情水準に主効果が見られ ($F(2.247)=7.50, p<.001$), 下位検定の結果, L 群>M・H 群という関係で有意差が認められた (参照 Table3)。しかしながら, きょうだいの有無の主効果は見られなかった。交互作用は有意ではなかった。

また, 自尊感情の水準別と性別の愛着スタイル得点と標準偏差は Table 4 のとおりであった。そこで愛着スタイルの各下位尺度得点を従属変数, 性, 自尊感情を独立変数とする。2 (性別) × 3 (自尊感情の得点水準) の 2 要因分散分析を行った。

愛着スタイル尺度の下位尺度である「見捨てられ不安」得点を従属変数とし, 性別と自尊感情水準を独立変数とする二要因分散分析を行ったところ, 自尊感情水準に主効果が見られ ($F(2.247)=8.40, p<.001$), 下位検定の結果 (参照 Table 4), L 群>H 群という関係で有意差が認められた。しかしながら, 性の主効果は見られなかった。また, 相互作用は有意ではなかった。

愛着スタイル尺度の「親密性の回避」得点を従属変数とし, 性別と自尊感情水準を独立変数とする二要因分散分析を行ったところ, 自尊感情水準に主効果が見られ ($F(2.247)=5.63, p<.05$), 下位検定の結果, L 群>H 群という関係で有意差が認められた。しかしながら, 性の主効果は見られなかった。交互作用は有意ではなかった。

考 察

自尊感情と愛着スタイルとの関連について

本研究では, 自尊感情水準によって, 愛着スタイルにも見捨てられ不安と親密性回避が自尊感情との関連が調査された。本研究の分析結果より, 自尊感情は愛着スタイルに結びついていることがわかった。自尊感情の高得点群・中得点群・低得点群の 3 群を比較した結果から自尊感情高得点群の愛着スタイルの中に見捨てられ不安と親密性の回避得点が有意に低く, 自尊感情の高さが愛着スタイルの安定に関連しているといえる。遠藤 (2006) は, 自分の求めに対して他者がそれを受容してくれるかどうかを予測する際, 自尊感情水準によって,

受容期待に違いが見られるという。自尊感情の高い人は自分の個人的な要請をすでに重要他者 (友人や恋人など) に理解してもらえると考える傾向があることを明らかにした。すなわち, 自尊感情が相対的に高い人は, 自己が他者から受け入れられるという信念を形成しやすいからである。一方, 遠藤 (1999) は自己の関係の評価に対して高い確信をもつことができにくい自尊感情低群は, 関係の評価の低さをおそらくは自己に帰属し, 受容期待を低下させることが判明した。自尊感情が相対的に低い人は, 見捨てられ不安の傾向がある。そして, 高い自尊感情は愛着不安定を改善する要因であると推察された。ここから, 不安定な愛着スタイルを改善するためには, 自尊感情を高めるように働きかけると有効であることが推測できる。

本研究では自尊感情と愛着スタイルの関わりについて検討したが, 今後の課題として, 不安定な愛着スタイルを改善するためには, 自尊感情を高める実践的な研究が必要であるといえる。

愛着におけるきょうだいの有無について

きょうだいの有無に愛着スタイル得点の有意差は認められなかった。このことから, きょうだいの有無と愛着スタイルに直接的な関連はみいだせなかった。釣田 (2007) は児童期のきょうだい関係と青年期の友達・先輩・後輩に対する愛着関係との関連という研究で, 男女ともに愛着関係と共存関係 (きょうだい関係の下位因子) との間に正の相関があり, きょうだいとの愛着関係が強いほど, 異性の友達に愛着を感じやすいと指摘している。つまり, きょうだい関係は重要他者 (友人, 異性) への愛着と関連するといえる。また, 中尾・加藤 (2004) は, 一般他者への愛着と重要他者への愛着の関連を検討し, 一般他者への愛着が親密な他者への愛着に関連していることを指摘した。そのため, きょうだい関係と友人関係は一般他者への愛着と関連するといえる。しかし, 今回の結果により, きょうだい関係は一般他者への愛着スタイルと直接に関連していないと考えられる。

本研究では, 一人っ子と非一人っ子において有意差が見られなかった。その原因は中国では伝統的な「家」の意識がまだ強く残っていると推測できよう。一人っ子政策が実行されている中国には, 大学生の大部分の養育者はきょうだいがいる。そして, 同世代の従兄弟がきょうだいのな役割を果たすと考えられる。従兄弟との付き合い内容に, 一緒に遊ぶ, 悩むことを打ち明け合う, 困ったときは助け合うという内容はあたかもきょうだいのような付き合いを行っている。従って, 一人っ子政策により兄弟の不在を補うためにイトコと頻りに付き合う結果として, 一人っ子と非一人っ子の愛着スタイルには差がないと言えるだろう。

愛着における性差について

性別に愛着スタイル得点の有意差は認められなかった。青年の愛着に関しては、佐藤（1993）によって、親以外の対象への愛着では男性の方が「拒否」が高く、女性の方が「安心・依存」が高いことを明らかにしている。すなわち、男性は親密性回避、女性は見捨てられ不安の傾向がある。今回の結果は、佐藤の結論と異なっている。中国の研究により、張（1997）は男児女性化の研究で、一人っ子で両親に溺愛されて、自立教育がすくなくて育つことが「男性の女性化」を招く大きな要因だと指摘した。また、韓（2007）は中国の学校教育で、子どもの知的な教育に集中しすぎて、自立教育を軽視し、子どもが青年になってから挫折と失敗に遭うと、あせりの感情、猶予、不安になりやすいと指摘した。そのため、男性は男らしくない、人に頼られる力が弱い、従って男性女性化になる可能性が高い。従って、中国で愛着スタイルにおける男女差が著しくない。

引用文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1 Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 母子関係の理論 I 愛着行動岩崎学術出版社1976).
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and loss: Vol.1 Separation*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 母子関係の理論 I 愛着行動岩崎学術出版社1977).
- Collins, N. L., & Read, S. J. (1990) Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58 (4), 644-663.
- 遠藤辰雄（1992）セルフ・エスティームの定義と展望, 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編)セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—ナカニシヤ出版 19.
- 遠藤由美（1999）「自尊感情」を関係性からとらえ直す実験. *社会心理学研究*, 39, 150-167.
- 遠藤由美（2006）自尊感情が社会的排除・拒絶への反応に及ぼす効果. *関西大学社会学部紀要*, 46-49.
- 福田千花（2006）きょうだい関係と両親・友達に対する愛着関係の関連について. *臨床教育心理学研究*, Vol.32. NO.1.
- 浜井聡美・利根川明子・小野田亮介・上淵寿（2011）愛着スタイルが対人的葛藤事態における情動に及ぼす影響. *東京学芸大学紀要*, 総合教育科学系, 62(1), 305-314.
- 韓黎（2007）男性儿童成长过程中女性化心理倾向问题厘析. *沧桑*, 第2号.
- 片岡祥・園田直子（2008）青年期におけるアタッチメントの違いと恋人に対する依存との関連について. *久留米大学心理学研究*, 7, 11-18.
- 金政祐司・大坊郁夫（2003）青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響. *社会心理研究*, 第19巻, 第1号, 59-76.
- 木下由華（2012）内的作業モデルの変容とソーシャル・ネットワーク理論との関連. *金城が学院大学院人間生活学研究科論集*, 第12号, 30.
- 中尾達馬・加藤和生（2001）成人の愛着行動とはどのようなものか？—女子大学生の自由記述の内容分析を通して—. *九州大学心理学研究*, 2, 99-106.
- 中尾達馬・加藤和生（2004）“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. *九州大学心理学研究* 5, 19-27.
- 大石佳世子・小林康江（2006）青年期における親になることに対する態度の構成要素と内的ワーキングモデルとの関連. *山梨県母性衛生学会誌* 5, 64-69.
- 酒井厚（2001）青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— *性格心理学研究*, 第9巻, 第2号, 59-70.
- 桜井茂男（2000）ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, Pp. 65-71.
- 佐藤朗子（1993）青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連. *名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）* 40, 215-226.
- Stewart, R. B. (1983) Sibling attachment relationships: Child-infant interactions in the strange situation. *Developmental Psychology*, 19, 192-199.
- 高井範子（1999）対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究. *教育心理学研究*, 47, 317-327.
- 詫摩武俊・戸田弘二（1988）愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. *東京都立大学人文学報*, 第196号, 1-16.
- 唐皓（2007）対人不安と自尊感情・対人信頼感の関連について. *臨床教育心理学研究*, Vol.33. NO.1
- 釣田博子（2007）児童期のきょうだい関係と青年期の友達・先輩・後輩に対する愛着関係との関連. *臨床教育心理学研究*, 33(1), 77.
- 嶋田美由紀・田中雄三（2005）青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響. *鳴門生徒指導研究*, 15, 16-29.
- 八木保樹（1995）自尊心と自己直視性 立命館教育科学プロジェクト研究シリーズ 3, 65-106.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30, 64-106.
- 楊洋・浅川潔司・福井紫帆・梶原由貴・南雅則（2013）中国大学生の愛着スタイルが友情の質に与える影響に関する青年心理学的研究 *兵庫教育大学学校教育研究センター紀要 学校教育研究*, 25 (印刷中)
- 張玉庭（1997）男孩女性化. *心理世界*, 第3期.

謝辞：本研究を遂行するにあたって、データ収集にご協力いただいた本学の院生楊洋さんと海南師範大学の唐玲先生に心より感謝致します。また、本文の修正にご協力いただきました。本学附属小学校教諭梶原由貴に心から感謝申し上げます。

(2012. 8. 29受稿, 2012. 11. 19受理)